

私のおすすめ本

今野広紀 教授
(社会保障論)

『日本の医療と介護』池上直己著

日本経済新聞出版社 2017年

本書は、日本の社会保障制度のうち、医療と介護を学ぶ上で欠かせない書籍である。この主題に関心のある学生の多くは、現行制度について調べ、その課題に着目すると思われるが、現在の制度の構築には政治的背景や文化的背景が強く影響している。これらを歴史的に振り返る視点が含まれている関連書籍は稀有である。そして、現行の制度に関する解説と課題の提示がなされており、卒業研究に用いる際には非常に有用であろう。

著者は医師であり、慶応義塾大学医学部の病院管理学の教授（現名誉教授）を務めた著名な研究者である。海外の医療事情、特にイギリスのそれに精通しており、医療と介護に対して慧眼を有する人物である。池上先生の調査研究には、私自身も参加させて頂いた経験があるが、事象を捉える眼力の精確性、研究姿勢の厳しき、海外の研究状況の把握に対する信頼性のいずれもこの分野では他の研究者を圧倒していると感じさせられた。

医療に係る内容は第1章から第6章、介護に係る内容は第7章から第8章、終末期ケアに係る内容は第9章から第10章に執筆されており、読者の関心に応じて選択的に学びを得ることができる。内容の流れとしては、第1章は「医師と病院の成り立ちと直面する課題」、第2章は「医療保険制度の成り立ちと直面する課題」、第3章は「診療報酬の仕組み：全体の概要」、第4章は「診療報酬の仕組み：包括評価」、第5章は「診療報酬の仕組み：医薬品と医療材料」、第6章は「医療計画の歴史と課題」、第7章は「介護の歴史と介護保険の制度設計」、第8章は「介護保険の課題とその対応」、第9章は「終末期ケアの特性と課題」、第10章は「終末期ケアに対する現場の対応」、第11章は「残された課題と改革私案」という章構成となっている。この主題に関心のある学生には、ぜひ一読をお薦めする。

『長期療養ケアに対する質の規制』 ヴィンセント・ムア[ほか]著

現代図書 2018年

本書は、医療と介護を含む長期療養ケア（Long-term care）に対する各国の質の規制のあり方について国際比較を行う内容である。表題の長期療養ケア（Long-term care）とは、日本語訳では介護ケアとされることが多いが、欧米ではケアの概念が日本のそれよりもはるかに広いため、訳者は敢えて長期療養ケアとしたとされる。国際比較研究の対象となっているのは、オーストリア、ドイツ、スイス、日本、オーストラリア、イングランド、オランダ、スペイン、フィンランド、アメリカ合衆国、カナダ、ニュージーランド、韓国、中国の14か国である。

規制の手法に着目して国際比較を行うと、オーストリア、ドイツ、日本、スイスの4か国の手法は、長期療養ケア従事者に対する教育・研修の基準とケア従事者の認可要件を規定し、それが規制の枠組みを支えている。この視点に立つと、これら4か国の政府は、専門職団体やケア事業者団体に対して基準の遵守に関する責任を委譲していることになる。この手法はオーストラリア、イングランド、オランダ、スペインで行われる実証的な監査に基づく手法とは全く異なるものである。こちらの4か国では、政府当局が法律で規定される規制に対するケア事業者の遵守状況の監視を重視する傾向が強い。他方で、カナダ、フィンランド、ニュージーランド、アメリカ合衆国の4か国ではデータによる集中的な質の測定と結果を公表する手法となっている。制度構築の歴史が浅い韓国と中国は発展途上の規制手法であると分類されている。

本書は14か国を事例としているために大著であるが、関心のある国を中心に読んだ後、全体の内容が整理された第16章「長期療養ケアの質に対する規制：我々は何を学んだのか？」を読むと当該国の規制のあり方の立ち位置のようなものが分かってくるものと思われる。この主題に関心のある学生には、ぜひ一読をお薦めする。

『明治維新という過ち』 原田伊織著

講談社文庫 2017年

私たちは、中学校、高等学校での日本の歴史教育において、明治時代を、日本の近代化が大きく進められた転換期であったと教えられてきた。しかし、本書はそうした歴史教育が、

それ以前の江戸時代を強く否定する薩長官軍の歴史教育に基づく教えであったことを伝える名著である。

日本では、1603年に江戸時代が成立してから266年にわたって平和な時代が継続したが、幕末から明治時代にかけては内乱が起り、昭和時代の初期には二度の大戦を経験した。しかし、これらは歴史の物差し^{メジャー}でみればすべて継続性の中での変化であり、時代区分で文化や国民の意識が急変したわけではない。そして、日本史の教科書で学んだ史実は、書き換えられた史実や真の史実が省かれた史実であることを本書は教えている。

本書では、江戸時代の史実や、御一新^{ごいつしん}、いわゆる明治維新への転換期に発生した数々のテロ事件とそこに関わる多くの藩や士族の争いや苦悩が鮮やかに描かれている。筆者の基本的な主張は、江戸時代に醸成された文化や生活習慣などの多くが、薩長官軍の下劣な手法（テロリズム）によって破壊され、欧化主義に突き進んだために他国への侵略を躊躇しない国となったというものである。

その主張を受け入れるかどうかは読者次第であるが、私たちが知らなかった史実を知る学びは大きい。日本大学の学祖、山田顕義は長州の出身で吉田松陰に師事したと伝わるが、吉田松陰とはどういう人物であったか、本書では紹介されている。本書での評価は強く否定的であるが、彼が残した言葉には学びがある。「志を立ててもって万事の源となす」。当時の政情に鑑みれば、その志が何であり、いま、それをどう評価すべきかは歴史学者に任せればよい。大切なことは、その言葉は現代においても通ずるという学びを得ることである。自分の学んできた日本史を振り返ってみたい学生には、ぜひ一読をお薦めする。

筆者自己紹介

今野 広紀（この ひろき）

1972年東京都生まれ。2001年一橋大学大学院経済学研究科修士課程修了、2008年一橋大学大学院博士後期課程単位取得満期退学。2004年医療経済研究機構、2007年国際医療福祉大学医療福祉学部、2016年日本大学スポーツ科学部、2022年日本大学経済学部に着任。